

小学校における「生」と「死」に関する教育の課題

—養護教諭と学級担任を対象として—

山田記念病院 佐藤晴美

筑波大学医学医療系 出口奈緒子

筑波大学医学医療系 大宮朋子

I. はじめに

今、子どもたちが生や死をどのように認識しているかが問い直されている。例えば、93.9%の小学生が所有するゲーム機の中では、誰でも人の命を奪うことができ、簡単にリセットして生き返らせることができる(内閣府, 2011)。また、警視庁(平成29)の統計によると、20歳未満のいじめの中で暴力や傷害事件が圧倒的に多いことがわかる。年代別にみると小学生が中学生の次に暴力や傷害事件を多く起こしている。児童生徒による命を奪う事件やいじめによる自殺などが数多く報道され、いかに子供たちの命を守り、子どもたちに命のかけがえのなさを伝えるかは極めて重要であると考えられる。

また、厚生労働省(平成29年)によると、児童のいる世帯のうち核家族世帯の割合は年々増えており(82.7%)、三世帯世帯は減少傾向にある(14.2%)。現代は、多くの子どもが祖父母と離れて暮らしていることも影響して、子どもが家族の死を身近に経験する機会が少ないと考えられる。

角・川波・市村(2012)らは Death Education(以下 D.E.)行動の必要性を感じている親は多いことを示した。同時に、親は家庭での D.E.行動を実施することに困難さを抱き、支援を必要としていることも明らかにされたが、地域や学校による親への支援はほとんど実施されていない。荃津・小林・井上・岩本・岡田・工藤(2009)は、D.E.は親が単独で実施するのではなく、家

族の協力を得て学校や地域との連携のもとで行われることが重要であると述べている。すなわち、学校現場などの社会全体で子どもと「生」「死」の問題を一緒に共有していくことが望ましいと思われる。

学校での教育については、赤澤・西牧・坂口・恒藤(2006)は養護教諭346名を対象に質問紙調査を行い、学校現場におけるデス・エデュケーションの開始時期は「小学校3・4年生まで」等、できるだけ早期からの実践が良いと考える養護教諭が多いことを示し、指導方法が確立されていないことが大きな問題であることを示した。また、教師間で関心度や意見に相違があることも、検討すべき課題であると報告している。しかしながら、彼らが指摘した「指導方法の難しさ」について、実際の教育現場における具体的にどのような困難があるかについての詳細は明らかにされていない。特に、小中学生で急速に増えるいじめは、傷害や自殺など児童生徒の生命に関わる問題であり、学級担任(以下、担任)と養護教諭の連携や協働は極めて重要になってくると考えられるが、「生」と「死」に関する教育において、担任と養護教諭の相互の連携について報告した研究も見られない。

以上より、本研究では「生」と「死」に関する教育において、養護教諭にとっての課題や困難の詳細を明らかにし、また、小学校教員と養護教諭の両者の意識や相違点、互いにどのような連携を必要としているのかを明らかにするこ

とを目的とする。

II. 方法

1. 対象

養護教諭にとっての課題や困難の詳細を描き出すために、面接調査を実施した。面接調査の対象者は、筆者の機縁によって協力を得た関東地方の公立小学校に勤務する 30～50 代の養護教諭 4 名である。教員歴による違いを考慮し、教員歴 4～25 年の対象者をサンプリング。対象者はすべて女性であった。対象者の属性を表 1 に示す。さらに、小学校教員と養護教諭の意識やニーズを明らかにするために、質問紙調査を行った。質問紙調査は関東地方の公立小学校 1 校の教員 40 名を対象とした。質問調査紙対象者の属性を表 2 に示した。調査期間は、面接調査、質問紙調査ともに平成 24 年 6～9 月であった。

2. データ収集方法

対象者の勤務校の保健室や、対象者が指定した会議室などで実施した。年齢や性別、経験年数や経歴など基本的な属性・特性については、事前に簡易な質問紙に回答してもらった。インタビューでは、現在の小学校現場における「生」と「死」に関する授業について難しいと感じている点とその理由、小学校学級担任（以下、教員）との連携の現状やあるべき姿、現在抱えている困難について尋ね、必要に応じて質問し、さらに詳しく語ってもらった。対象者の承諾を得られた 2 名分の内容はすべて、IC レコーダーに録音した。他の 2 名については、承諾を得てできるだけ詳細にメモをとった。

教員を対象者とした質問紙調査は、無記名質問紙用紙を用いて行った。内容は、「生」と「死」に関する授業の必要性や問題点、養護教諭との連携について、「非常に思う」から「全く思わない」の 4 件法で回答してもらった。回収は、小学校に質問紙票と回収封筒、回収 BOX を送付し、回収 BOX で回収した。40 名に配布し、

回収は 20 部であった（回収率 50%）。

3. 分析方法

インタビューは、個人情報を保護する目的で分析に影響が生じない範囲で改変し、逐語録に起こしてデータとした。データを繰り返し読み、意味内容の類似するものを集めてコーディングをし、カテゴリーを作成した。質問紙データは単純集計を行い、グラフ化した。

4. 倫理的配慮

調査対象者には、口頭と文書で研究の目的・方法、研究への参加が自由意志に基づくこと、随時拒否と撤回が可能であることを丁寧に説明し、文書で承諾を得た。また、本研究で知り得た個人情報は漏洩・盗難・紛失等が起こらないように厳重に管理し、論文に情報を記載する際は、個人の特定ができないよう固有名詞は用いず、記事号や数字で表現すること、インタビューへの協力を途中で中止・中断される場合においても不利益を生じないことを約束した。

III. 結果

1. 養護教諭へのインタビュー

分析の結果、21 サブカテゴリー、6 カテゴリーが抽出された。(図 1) 以下、データを「 」、養護教諭に対し、一人あたり 1 時間～2 時間の半構造的インタビューを、対象サブカテゴリーを《 》、カテゴリーを【 】と示す。語りは斜体で示した。

表1. インタビュー対象者（養護教諭）の属性

	A氏	B氏	C氏	D氏
年代	40代	30代	50代	30代
教員歴	25年	4年	32年	6年
学校数	4校目	4校目	4校目	3校目

表2. アンケート対象者の属性 n=20

	男	8(40%)
性別	女	12(60%)
平均年齢	39±1.4歳	
教員歴	10年未満	8(40%)
	10年以上	4(20%)
	20年以上	4(20%)
	30年以上	4(20%)
	低学年	7(35%)
担当学年	高学年	9(45%)
	その他 ^{注)}	4(20%)

注) クラスを持っていない、重複してクラスを受け持っているなど

(1) 【学校教育で死に触れることの難しさ】

「死」について、「例えば身内の方にご不幸がないと実際に人間の死に立ち会うことがないので、その中で死の指導ってすごい難しい」という言葉が示すように、「死」のイメージができない子どもへの指導は簡単ではなく、労力を要する分野であることがわかった。また、学校教育という枠組みの中では、「死については取り上げづらく、「マイナスイメージのある『死』を指導するよりも、プラスの側面から『命の尊さ』を伝えていく方が適しているのではないか」という思いを抱いていた。さらに、「死の教育を行うことで死後の世界について知りたがったり、自殺を図ったり、誰かを殺してみたいという気持ちが湧いてきてしまうかもしれない」「死につながるとそれがトラウマになったり恐怖を与えてしまったり、フラッシュバックしてしまうかもしれない」というように「死」に対して子どもが恐怖を抱くことへの危惧は、「子どもが『死』の世界に興味を持ってしまふ可能性」といった子どもたちに生じうる影響を懸念していた。また、「未来ある子どもたちに『死』を意識させることへの戸惑い」として、「死もきちんと教えなきゃいけないってなってきたらと、殺伐としてくるから怖い」という思いも語られた。専門的知識のある立場から授業を行うことは説得力が高いという考えから、「こういう授業を行うときは白衣を着て行うようにしている」と語り、子どもに対し、養護教諭は担任の先生とは専門が異なり、より健康や命に関わりの深い立場であることを明確に示すために、「白衣を着る」という手段をとる者もいた。

(2) 【命の誕生の教育のしづらさ】

「生」については、生命の誕生に関連して主に性教育についてカテゴリーが抽出された。「性教育はデリケートな問題で、学習指導要領で性交って言葉が使えないとか」「真実を伝えたいけれど、伝えられないっていう。曖昧にし

なければいけなくて、はっきりすることがいいかはわからないけれど、伝えるべきことがきちんと伝えられない問題がある」など、「性教育における言葉の制約」「言葉の制限から子どもの理解の混乱を招きやすい」といった問題が語られた。性教育は大事な授業であっても、授業を直接見ていない保護者にとっては、教育の現場である学校で行われる教育内容として相応しくないと思われる可能性があり、「性教育関係は保護者から苦情を受けやすい」と、性教育のやりづらさを指摘する養護教諭もいた。

(3) 【教育のタイミングを計る必要性】

小学校は1年から6年と年齢の幅が広いことから、「低学年からやっておくとそんなに抵抗なく入れる」が、「急に高学年になって性教育とか命って言われると構えちゃう子が多い」「(高学年は)いきなり裸の教材とかも嫌がったりとか今更偽善の話とか思っちゃったりもするから」など、「学年ごとに段階を踏んだ授業内容にする必要性」と語られた。また、「意外と子どもって忘れてしまう」というように、「生」と「死」に関する授業は年に数回程度であるため、できる限り低学年のうちから「繰り返して伝えていかなければならない」と分野でもあると養護教諭は認識していた。「自分の身長とか体重とか自分の成長が目に見えて記録でわかる時に(授業を)やった方が(自分の命を)大事にしようって思えるかなって」という語りも示すように、行事や事前に指導が必要な時など「機会を逃さずに行う必要性」も挙げられた。

(4) 【子どもの実態に合った指導をする難しさ】

小学生は6歳から12歳までの児童がいることから、「発達段階に応じた伝え方と授業内容」にするよう工夫が必要になる。加えて、個別の発達の差も大きいことから、「その子にとってはやっぱりその時が(授業を受ける)タイミングじゃなくて、何のことかわからずに(授業が終

アしてしまう)」というように《個人差を考慮した指導の困難さ》を感じていた。さらに、「例えば大事件が起きて誰か亡くなってしまった等、この状況で今の話(生と死に関する話)をしていいのか」というように《学年やクラスの実態に合った時期と内容を捉える難しさ》といった問題も生じていた。

(5) 【家庭環境への配慮の必要性】

現代の家族背景は多様であるため、家族構成が複雑な子どもがいる場合は、内容により傷付けてしまうことを養護教諭は懸念していた。例えば「生」に関する授業において、「生まれた時の重さはこのくらいだったなどの内容もやるが、そういう子(複雑な家庭環境の子)は生まれた時の資料がなかったりするから、そういう所は飛ばして授業やったりとか」と語ったように、《複雑な家庭環境に育つ子どもへの配慮》が必須であった。「養護施設に通っている子どもは何かしらの事情を抱えているため、いきなりそのような話(生と死に関する話)をしたら傷つけてしまうかもしれない」というように《愛情を実感せずに育った子どもの存在》を踏まえ授業内容を考慮しなければならなかった。

(6) 【担任と連携の必要性】

「担任の先生だけに任せるのも偏ってしまうし、負担になってしまう」と、対象者のほとんどの養護教諭が述べた。『生と死に関する授業』を担任が行うことで《担任の負担増大への懸念》を養護教諭は抱いていた。しかし、「担任が一人で行うこともあるし、(養護教諭が担任に)呼ばれれば(養護教諭も)授業に入る」といった現状から、《養護教諭がどの程度関わるかは担任次第》となっていた。授業の裁量は主に担任にあり、「それ(授業)がきちんと実施されるかされないかは、担任の先生の(次第)、まあいっかってやったことにしちゃってる様などころもあるかもしれない」といったように、授業が《適切に実施されるかは担任次第》である

ことも語られた。また、「(担任が)出産は痛いと教えてしまい、女の子は子どもを産みたくなくなるかもしれない」など、担任が授業を主導することで、《担任の生と死に関する主観の影響》が授業内容に大きく反映されることについて述べる養護教諭もいた。

2. 教員への質問紙調査結果

《「生」と「死」に関する教育の必要性》に関しては、『子どもが命を軽視しているような傾向がある』に「非常にそう思う」「少し思う」の回答が19人(95%)と多かった。次いで『命の始まりの性教育は行われているが、終わりの死の教育は行われていない』が18人(90%)と多い回答であった(図2)。《「生」と「死」に関する教育の問題点》に関しては、『時間的な余裕がない』の「非常にそう思う」「少し思う」の回答が17人(85%)で最も多く、次いで『指導方法が確立されていない』と『教員間で関心度や意見の相違がある』16人(80%)という結果が得られた(図3)。

《養護教諭に求める役割や支援》に関しては、『教員主体の補佐をしてほしい』に対し、全員が「非常にそう思う」「そう思う」の回答であった(図4)(他回答結果の詳細については図2~4参照)。

IV. 考察

今回、養護教諭と教員を対象に調査を行うことで、以下のような共通点があることが分かった。まず、養護教諭も教員も、「死」に関する教育が十分になされていない、教員間で関心度や意見の相違がある、養護教諭と教員の連携は必要だと感じている、という点である。一方、相違点として、養護教諭は「死」に関する教育を行うことに対して強い抵抗を感じている反面、教員はそれほど抵抗を感じていないこと、また、養護教諭が生死に関する教育を教員任せにしてしまうことは負担が大きいのではないかと感じているのに対し、担任主体で教育を行いたいと

考える教員が多いことがわかった。以下、養護教諭への調査の結果を中心に考察を述べる。

1. 「生」と「死」に関する教育の難しさ

＜死をイメージさせる指導は難しい＞に関して、現実で死に直面する機会の少ない子どもたちに死を想像させることは難しく、養護教諭はやりにくさを感じていることが明らかになった。佐藤・齋藤(1999)は、現代の子どもを取り巻く環境は激変し、核家族や少子化の流れの中で身近な者の死を体験する機会は減少すると共に、一方ではテレビなどの中での暴力や殺人シーン、さらにはゲームのなかでの遊び感覚の死は氾濫してきていることを指摘した。そして、こういった環境の中での現代の子ども達の死への意識は昔とは変化してきていると述べている。教員の調査結果からも、『子どもが命を軽視しているような傾向がある』『現実の死を体験する機会が減ってきている』と感じているとする回答が前記では19人(95%)、後記では15人(75%)と過半数以上が得られた。学校現場では上記の様な生活背景がある子どもに個人ではなく、複数の子ども達を対象に「死」に関する授業を行わなければならない。よって、それぞれの子ども達に「死」をイメージさせる指導に、より一層困難を覚えるのではないかと考えられる。

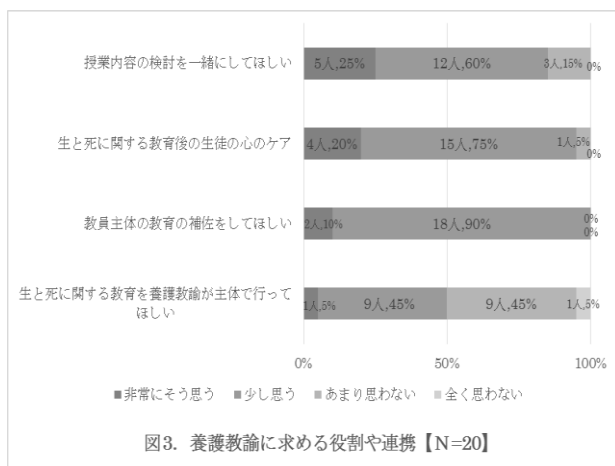
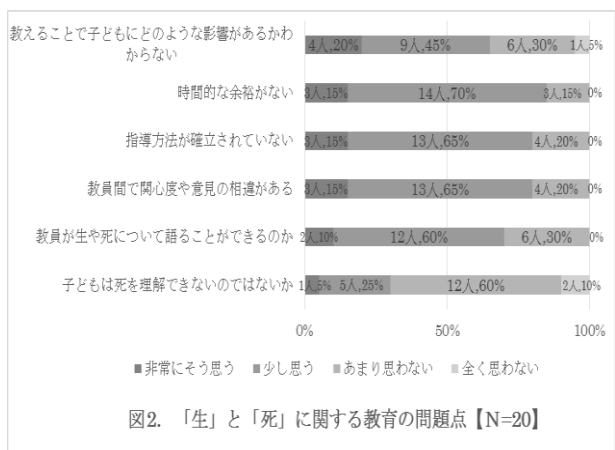
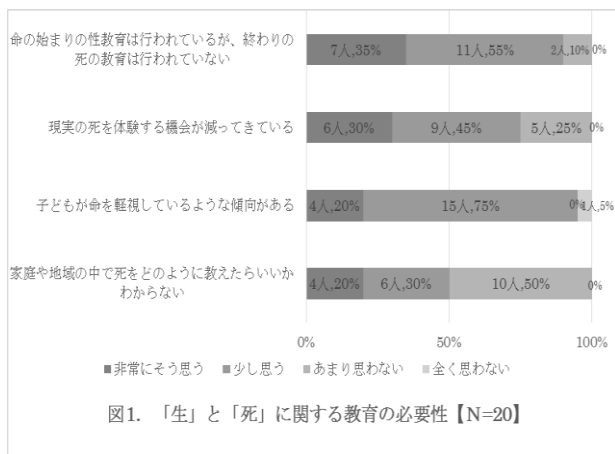
また、岡田(2014)は「死」についての指導方法や教材が確立されておらず、そのカリキュラムや指導計画も作成されていない状態を指摘している。やりにくさを感じる授業である上に、指導計画が未確定であることも、養護教諭が難しさを感じている要因の一つと推察される。

＜学校教育では死について取り上げづらい＞
＜未来ある子どもたちに「死」を意識させることへの戸惑い＞
＜「死」に対して子どもが恐怖感を抱く可能性＞
＜子どもが「死」の世界に興味を持ってしまう可能性＞
については、養護教諭4人のうち3人が語った。一方、教員への質問紙調査では、『教えることで子どもにどのような影響があるかわからない』の項目に同感を

示したのは13人(65%)であり、そのうち「非常にそう思う」と回答したのは4人(20%)であった。この結果から、養護教諭のほうが教員より、「死」に関する教育を慎重に捉えている可能性が示された。長崎・松岡・山下(2006)の研究では「死」に対しマイナスイメージを持つ者が多く、高年層に「死」をタブー視する傾向があると明らかにしており、養護教諭の語りからも「死」に対しマイナスイメージを抱いていることが汲み取れる。学校で「死」を取り上げることに抵抗を抱く理由の一つとして、日本では「死」は不吉なものとして忌み嫌われ、否定的に捉えられてきた背景が影響していると考えられる。岡田(2014)は、学校において死がタブー視される理由について述べており、暗く重苦しい授業内容になることや「死」について学ぶことで子どもが「死」を美化したり、短絡的な行動をとるのではないかと危惧している傾向にある。いじめなどの事件が絶えない現代であるため、養護教諭も授業で「死」について触れることで、子どもが死に対し興味を抱き、自殺やいじめなどにつながる恐れを強く感じているのではないかと考えられる。

また、養護教諭が「死」の教育に対して抵抗を強く感じている理由として、カテゴリーにも示されたように、養護教諭は子どもたちにも健康や命に関わる専門職であると理解されており、教員による教育に比べ説得力が増すと感じている可能性が考えられる。専門職の与える影響について、例えば鈴木(2009)は、禁煙をうながすのには、周囲の家族や友人よりも、専門職からの助言のほうがより影響力が大きく重要な意味を持つと述べている。養護教諭自身が専門職であると自覚しており、その責任を認識するがゆえに「死」に関する教育に慎重になると推察される。

表1.インタビューから抽出されたカテゴリ			
カテゴリ	サブカテゴリ	サブカテゴリの説明	語り(例)
【学校教育で死に触れることの難しさ】	「死」のイメージが出来ない子ども	直接的な「死」の体験が極めて少ない子どもたちに対して、具体的に「死」をイメージさせることはかなりの指導力を要する。	“例えば、身内の方がね、何かそういう不幸があった死かかっていうのがない、人間の死に立ち合うことってまずないじゃないですか、そうした時にやっぱり、そこを(死を)イメージさせる指導ってすごく難しくて”
	学校教育では「死」については取り上げづらい	学校という場面では、マイナスイメージのある「死」を指導するよりも、プラスの側面から「命の尊さ」を伝えていくほうがふさわしいのではないかとこの思いがある。	“学校の教育として、死を扱うのはちょっとまだ難しいような気がするなあ、それよりは命の尊さをうんーと伝えてそんな簡単に命を落としたりいけなくて”
	未来ある子どもたちに「死」を意識させることへの戸惑い	将来があり、子どもたちには希望あふれる未来に向かっていてほしいという思いから、子どもたちには「死」よりは命の大切さや素晴らしさを強調していきたい。	“死もきちんと教えなきゃいけないってなってきたら、結構殺伐してくような気がするから、怖いって思うような気がするんだけどね。でもやっぱり夢があってほしいと思うから、子どもたちの将来にね”
	「死」に対して子どもが恐怖感を抱くことへの危惧	普通の生活で「死」を意識することは少なく、「死ね」ということは未知であり、授業を行うことで、「死」に対して異常に恐怖感を覚える子どもが出てくるのではと不安に思う。	“死」につなげるとそれが外ラウマになったり、恐怖感を与えてしまったり、フラッシュバックしてしまう恐れがあるかもしれないよ”
	子どもが「死」の世界に興味を持ってしまう可能性	「死」の存在を教えることで、「死」に対して子どもたちがかえって興味を持ってしまわないかという恐れがある。	“例えば、「死んだらどうなるんだろう」とか、死後の世界について知っていたり、自殺を図ったり、誰か殺してみたいとかって思ってしまうかもしれない。”
	養護教諭が「死」の教育をすることの重み	「保健室の先生」という専門的な立場から「死」を語ることで、説得力が増し、児童が捉える「死」の意味が大きくなる。	“身体・病気のことを知っている専門的知識のある立場から行うことで説得力があるよね。こういう授業を行うときは、白衣を着て行うようにしている”
【命の誕生の教育のしづらさ】	性教育における言葉の制約	学習指導要領により性教育については言葉の制限がかなりあるため、具体的な話が出来ない。	“性教育はデリケートな問題で、「性交」っていう言葉が使えないとか、学習指導要領で”
	言葉の制限から子どもの理解の混乱を招きやすい	性教育において「性交」を使ってはならない、といった言葉の制限により、その制限の中で子どもたちが具体的にイメージしたり、納得して理解できるような説明をするのが難しい。	“なんか本当に伝えたい真実を伝えたいんだけど、伝えられないっていうあいまいにしなければいけない、あいまいにすることで、はっきりすることがいいことかはわかんないけれども、やっぱり伝えるべきことがきちんと伝えられないっていう、そういうなんか問題点があるかな”
	性教育関係は保護者から苦情を受けやすい	大事な授業であっても、授業を直接見ていない保護者にとっては、教育の現場である学校で行われる教育内容としては、ふさわしくないのではないかとと思われる可能性がある。	“そこだけ見ると確かに変な授業じゃないですか、身体を使ったりとかだから、でも流れ全部で見ればそんなに変な授業ではないし、とって大事な授業なんだけど”
【教育のタイミングを計る必要性】	繰り返し伝えていかなければならない	年に数回程度の授業であるため、できる限り繰り返し伝えていくことが必要分野である。	“意外とね、忘れてるんですよ、子どもって”
	学年ごとに段階を踏んだ授業内容にする必要性	高学年になった時に授業内容を受け止められ、理解を得られやすくするために低学年から授業を行うことが必要である。	“低学年からやっておくとそんなに抵抗なく入れることなので、急に高学年になって性教育とか命って言われると、構えちゃう子が多い、いきなり裸の教材とかも嫌がったりとか、今さら偽善の話とか思っちゃったりするから、ちよちよやっておくのが大事”
	機会を逃さずに行う必要性	行事や事前に指導が必要な時など、指導をするべきわずかな機会を逃さないで行う必要がある。	“自分の身長とか体重とかが目に見えて記録でわかる時にやった方が子ども自分の成長がわかるっていうか、それで大事にしようって思えるかなって、思うんでその日がいいかなと思います”
【子どもの実態に合った指導をする難しさ】	学年やクラスの実態に合った時期と内容を捉える難しさ	毎年子どもの実態は変わる。各学年、各クラスそれぞれの特徴に合った指導をすることが大切である。	“学級の実態に合っていることが大切。例えば、大事件が起きて誰かが亡くなってしまった、この状況で今この話をしたいのかとか”
	個人差を考慮した指導の困難さ	その授業実施の時点では、内容を具体的に想像出来ていなかったりなど、理解力には個人差がある。	“単発で終わってその時は「あー。」って思うかもしれないし、その子にとってはやっぱりその時がタイミングじゃなくて、何のこともわからずに”
	発達段階に応じた伝え方と授業内容	発達段階に合わせて理解できる言葉を使用したり、伝え方を工夫して授業を組み立てる必要がある	“(内容が)発達段階に合っていることが大切”
【家庭環境への配慮の必要性】	複雑な家庭環境に育つ子どもへの配慮	家族構成が複雑な子どもがいた場合は、内容により傷つけてしまう恐れがある。	“生まれた時の重さはこのぐらいだったとかっていう授業も三年生とかよくやるんだけど、そういう子(施設の子)は生まれてきた時の資料がなかったりするから、そういうところは飛ばして授業やったりとか”
	愛情を実感せず育つ子どもの存在	何らかの事情で、施設で育ててきたり親からの愛情を実感せずに育ってきた子どもがいた場合は、「自分は愛されていないんじゃないか」などと感じてしまう恐れがある。	“親がいない子どもなど養護施設に通っている子どもは何かしらの事情を抱えているため、いきなりそのような話をしたら傷つけてしまうかもしれない”
【担任と連携の必要性】	適切に実施されるかは担任次第	教員の場合、簡単な授業で済ませてしまうこともあり、「生」や「死」に関する授業がどのような内容になるのかは、担任に左右される現状がある。	“それ(授業)がきちんと実施されるかされないかは担任の先生の、本当は実施されるべきなんだけど、でも、まあいつかって言ってやったことしちゃってるようなところもあるかもしれない”
	担任の「生」や「死」に関する主観の影響の大きさ	授業の指導者である担任の「命の誕生」や「生死」に関する感覚や主観、見解などが授業内容に大きく影響する。	“出産は痛いって教えてしまい、女の子は子どもを産みたくなくなるかもしれない。出産は素晴らしいことと思えるように授業を行わなければならない”
	養護教諭がどの程度関わるかは担任次第	基本的に担任が主体で授業を行うため、養護教諭の関わりは、担任からの要望や相談次第で変わってくる。	“(担任が一人で)行うこともあるし、それで(養護教諭が担任に)呼ばれれば(養護教諭も)授業に入る、来てって”
	担任の負担増大への懸念	他の教科があるため、全て担任に任せると負担が大きくなってしまいう現実がある。	“担任の先生だけが任せるのも偏ってしまし、負担にもなってしまう”



上記で述べたように「死」がマイナスイメージであるならば、「命の誕生」はプラスイメージである。そのため「命の誕生」に関する教育は取り組み易いのではないかと考えられたが、実際は「性教育における言葉の制約」≪言葉の制限から子どもの理解の混乱を招きやすい≫≪性教育関係は保護者から苦情を受けやすい≫といった問題を抱えている。住本（2015）の研究で

は、道徳教育や命の教育の実践や充実を求める子ども達の存在を示唆し、命の大切さについて教えてもらっていないと答えた子どもが多く存在しており、早急に「いのちの教育」のカリキュラム化を進めていくべきだと述べている。教員への調査結果でも「生」や「死」に関する教育について『指導方法が確立されていない』ことを問題視する回答が多く得られている。よって、「死」の指導方法だけでなく、「生」と「死」両方を踏まえた命の授業の指導方法の確立や再考の必要性が推察される。

2. 教育のタイミングと子どもの実態

＜繰り返し伝えていかなければならない＞＜学年ごとに段階を踏んだ授業内容にする必要性＞というカテゴリから、他教科と同様に、次の学年で行う授業準備のための段階的な準備が重要であることがわかった。性教育は小学校、中学校から高校へと一貫した内容で、問題意識の共有化が重要であると末包（2009）が述べているように、小学校での教育がその後にもつながっていく。曲山・加藤・黒崎・植草・大内方・川村・千島（2007）も学童期は性教育を通して、人間にとって不可欠な性の持つ価値と、その多様性を学ぶ時期であると報告し、小学校から性教育は必須であると述べている。繊細で重要な分野であるからこそ、単発的に授業を取り入れるのではなく、初等教育である小学校低学年から慎重に検討を重ね、段階的にかつ継続的に十分に教育がなされるべきだと考える。

そして、養護教諭の「その子にとってはやっぱりその時が(授業を受ける)タイミングじゃなくて、何のことかわからずに(授業が終了してしまう)」の語りから、幅広い年齢層の児童へ行う指導は容易ではないことが理解できる。その上、子どもの発達には個人差が大きいため、個別の発達の差を考慮した指導が必須となる。子どもの発達段階だけでなく、個人の成長発達を踏まえ、教育を行う時期や授業内容の検討を行うことが

重要であると考える。

3. 担任と養護教諭の連携

「生」と「死」に関する教育に関しては、特に担任と養護教諭の連携・協働が必要とされていることが本研究から明らかになった。＜担任の『生』や『死』に関する教育の主観の影響の大きさ＞に関して、生死などに対する感覚は人それぞれ異なるため、教員の教え方や伝え方が子どもの捉え方に影響する可能性が養護教諭の語りから示された。教員への質問紙調査の結果からも『教員間で関心度や意見の相違がある』という項目の「非常にそう思う」「少し思う」の回答が80%（16人）を占めた。赤澤ら（2006）も教師の年齢、経験、知識、考え方、感じ方は一人一人異なっており、故に教師に一樣でしっかりとした死生観を期待し、確固たる考えの上で死の教育を行うように求めることは難しい、と述べている。さらに、教師も生と死について子どもと共に考える授業であることを教師自身が認識しておく必要があると指摘している。また岡田（2014）は、教師自身が死についての教育を学校で受けていないことや死そのものの体験のない者の存在を示しており、教師自身が教育を行う上での専門的な知識や死生観を有していない可能性が高い。これらから、「生」や「死」に関する授業は教育者の経験や知識、死生観が影響しうる可能性が高いといえる。養護教諭は日常の業務の中でも教員とコミュニケーションを図り、それぞれ教員が持つ生死などに対する感覚や価値観なども含めて把握しておく必要があると考えられる。

養護教諭への面接調査の結果、「生」と「死」の教育を教員任せにしてしまうことで、教員に負担が大きくなってしまっているのではという懸念が語られた。しかし、教員への質問紙調査では、『生と死に関する教育を養護教諭が主体で行ってほしい』という項目に対し「非常にそう思う」「少し思う」の回答が10人（50%）あったの

に対し、『教員主体の教育の補佐をしてほしい』に同意する回答は20人（100%）であった。担任は、学校現場において子どもたちに一番近い存在であるからこそ、教員自身が主体で「生」と「死」に関する授業を実施したいのではないかと推察する。一方、教員主体になることで、却って「生」と「死」に関する教育を疎かにされてしまう可能性を養護教諭は懸念していた。実際子どもたちと密に接し、日々の様子を近くで実感できるのは担任である。一般的な子どもの心身の発達段階をベースに、子ども一人一人を理解した上でどんな授業内容にするか、どんな伝え方が適しているかを考えるには、やはり両者の連携は欠かせないものであると考える。以上より、養護教諭は教員と連携・協働を図り、役割分担を行い、小学校における「生」と「死」に関する教育の在り方を考察・実践していく必要があると考える。

昨今のいじめや自殺の報道からみても、子どもを取り巻く状況は調査時期より確かに深刻になっている。だが、「生」と「死」に関する教育についての根本的な葛藤は普遍的に存在するものであり、あるいはより一層、重要度が増していると考えられる。近年、我が国では地震や豪雨、噴火など、これまでにない多くの災害が発生し、地域社会で多くの命が失われている。自分自身が被災したり、あるいはテレビ報道などで生死の有り様を頻繁に見聞きすることが出来る。情報が錯綜する時代であり子どもたちも容易に「死」という言葉を目にすることが出来てしまう。そういった環境の中、教育現場である学校で「死」を避けて良いのであろうか。

「生」の終末は「死」であり、必然的に誰もが「死」に関わる時が来る。生きていく上で「死」は切り離すことは出来ない。生活背景の変化、いじめや自殺が問題視されているからこそ、教育現場である学校で命の大切さとともに、命の終末について伝えることは、学校教育の極めて重要な役割ではないかと考える。

V. 研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、対象者が少ないことや養護教諭と担任教員の調査方法が異なること、データが古いことが挙げられる。今後は対象を増やしていく必要がある。加えて、近年我が国で極めて多くの災害が発生し命が失われている現状がある。本研究は、大災害が頻発する前の調査であることから、調査実施時と比較して子ども達のみならず養護教諭の死生観も変容している可能性は否定できない。大災害後のデータを早急に収集し、結果の比較も検討していく必要がある。また今後の展開として、抽出したカテゴリーについて、どの程度養護教諭が経験しているのか、質問紙調査などで量的に明らかにすることも必要である。本研究は、質問紙調査の実施も1校であり、対象人数も少なかったことから、今後は広く養護教諭、教員に調査を行い、「生」と「死」の教育とは切っても切れない、いじめや自殺の問題も念頭に置き、現代の事情に深く切り込んだ形で研究を深めていく必要がある。

XI. 結論

本研究では、小学校における「生」と「死」に関する教育の課題を明らかにすることを目的として調査を行った。その結果、特に「死」に関する教育は、【学校教育で死に触れることの難しさ】【命の誕生の教育のしづらさ】から養護教諭は非常にやりにくさを感じていることがわかった。特に「死」に関する教育においては、実際に小学校ではあまり実施されておらず、この教育に抵抗を感じている養護教諭が多いことが明らかになった。しかし、子どもたちを取り巻く社会状況を考えると、むしろ「死」に関する教育も積極的に行うべきである。また、小学校での教育が中学校、高等学校へと続いていくため、小学校から実施されることが望ましい。養護教諭と教員の連携に関しては、養護教諭が

ただ教員の授業の補佐をするだけではなく、教員が持つ生死などに対する価値観や考えも含め、認識しておく必要が示唆された。

XII. 謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力頂きました養護教諭ならびに教員の先生方に厚く御礼申し上げます。

XIII. 引用文献

- 赤澤正人・西牧真里・坂口幸弘・恒藤暁 (2006) 養護教諭を対象としたデス・エデュケーションに関する意識調査 学校現場で生と死を教えることについて、ホスピスケアと在宅ケア,14(3), 195-200.
- 角智美・川波公香・市村久美子 (2012) 子どもへの Death Education 行動に関する親の意識, 茨城県立医療大学紀要, 17, 41-50.
- 警視庁 (2017) 平成 29 年における少年非行, 警視庁, 児童虐待及び子供の性被害の状況, <https://www.npa.go.jp/safetylife/syonen/hikou_gyakutai_sakusyu/H29-revise.pdf>, (閲覧日 2018 年 4 月 9 日) .
- 厚生労働省 (2017) 国民生活基礎調査の概況, 厚生労働省, <<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa17/dl/10.pdf>>, (閲覧日 2018 年 10 月 30 日) .
- 荃津智子・小林千代・井上由紀子・岩本喜久子・岡田洋子・工藤悦子 (2009) 小学生をもつ親が子どもと「死」について話すことの意識と実態, 天使大学紀要, 11, 1-10.
- 曲山さち子・加藤サツキ・黒崎治美・植草愛・大内方規子・川村みか・千島幸子 (2007) 千葉県内における小学校の性教育の実態, 帝京平成看護短期大学紀要, 17, 27-30.
- 内閣府 (2011) 青少年のゲーム機等の利用環境実体調査, 内閣府, <[9](http://www8.cao.go.jp/youth/youth-</p>
</div>
<div data-bbox=)

harm/chousa/h22/game-

jittai/html/index.html>, (閲覧日 2018 年 4 月 9 日) .

長崎雅子・松岡文子・山下一也 (2006) 年代および性別による死生観の違い—非医療従事者を対象としたアンケート調査を通して—, 島根県立看護短期大学紀要, 12, 9-18.

岡田芳廣 (2014) 学校における死についての教育の実態と実践について, 早稲田大学大学院教職研究科紀要, 6, 1-13.

佐藤比登美・齋藤小雪 (1999) 現代の子どもの死の意識に関する研究, 小児保健研究, 58(4),

515-526.

住本克彦 (2015) 小学生・中学生・高校生の「命」に対する意識の実態—「いのちの教育」に関する質問紙調査結果をとおして—, 環太平洋大学研究紀要, 9, 159-169.

鈴木一夫 (2009) 喫煙, 治療, 91(11), 2606-2610.

末包博 (2009) 【今、改めて“思春期”を考える その問題点と対策】 私たちはこうしている 尼崎市における性教育の取り組み, 産婦人科治療, 99(6), 643-646.

Difficulties in Education on " Life "and" Death " in Elementary School -Questionnaire Study and Interview for Yogo Teachers and Class Teachers-

In this research, we aim to clarify the difficulties and problems in education concerning “life” and “death” in elementary school, by examining the cooperation between elementary school teachers and *Yogo* teachers, in this regard, and with regard to their education needs.

Semi-structured interviews were conducted on four elementary *Yogo* teachers and anonymous self-administered questionnaires were distributed to 40 faculty members, excluding *Yogo* teachers, of one elementary school.

From the interview with *Yogo* teachers, we found that education on death was not sufficiently covered as compared to the education on life. Death has a strong negative connotation, and *Yogo* teachers wanted to convey the "preciousness of life" in schools, which has a more positive image than death. In the survey of teachers, the result showed that there was no time to hold classes on life and death education. Although the *Yogo* teachers strongly resisted the education of death, the elementary school teachers found that few people resisted as such. The survey also showed the possibility of the teachers' view of life and death affecting the contents of education. Elementary school teachers and *Yogo* teachers felt the necessity to cooperate with one another. As children's bullying and suicide increases, and the social environment also changes, it is difficult for children to imagine death, so classes teaching about death at elementary schools are necessary. As *Yogo* teachers themselves are professionals and recognize the magnitude of its impact on children, they seem to be cautious about the education of death. In most cases, it

is the teacher in charge of the class who mainly conducts education on life and death. Because the teacher's view on life and death is related to the content of the lesson, it is also important for the *Yogo* teachers to understand the teacher's point of view. While the education on life and death is extremely difficult, cooperation between *Yogo* teachers, as professionals, and classroom teachers is indispensable.